

くらし中心



no. 20

居場所って

無印良品

居場所って

- 2 ほっとする場をもとめて
ひとりひとりが居心地よく、
誰かと一緒に落ち着けて。
居場所の話は人の話、心の話
- 4 ひとりじゃない、という安心
年齢を重ねても、病を得ても、
あたりまえの生活をあたりまえに
送りたい。実践の場を訪ねます
- 7 小さな空き地に目をやれば
ふだん気に留めずに
通り過ぎる場所が
いきいきするきっかけを
- 8 わたしの好きな場所
自然に囲まれて、都会に育って。
幼い頃の、大人になってからの。
好きな場所の話はなんとも心躍ります
- 10 まなざしから生まれる居場所
なにもなくてもいい。
生きているだけでいい。
子どもにとって大切な場所
- 12 大人の洞穴、茶室
小さいのに無限の広がり。
堅苦しそうでもなんでもあり。
茶室は自由、茶室は宇宙
- 14 地球丸ごとふたりで
34年間で186カ国。
終わりのない旅は毎日が
驚きと冒険に満ちています
- 16 10代の居場所はどこに？
学校、家庭、街のなか。
それからスマホも彼らの居場所？
アンケートして見えてきたこと
- 18 自分らしく、居られるところ
限界集落にある元校舎。
ルールで縛り合うことなく、
集って暮らす彼らの日常
- 20 人類の居場所、地球について
地球は私たち人類
みんなにとってのふるさと。
長い目を持つと見えてくること
- 22 見方を変えると場所は変わる
まるきり同じもののなにに
見方を変えたとまるで違うものに。
それは場所でも同じこと
- 24 環境は生物の中にある
居場所のことを知るために、
人間のこともつと知りたい。
太古は未来につながっている



ほっとする場をもとめて

自然災害、国家間の紛争、格差社会など大きな問題に始まって家族の中でのいさかいやさまざまな人間関係のもつれ、住空間への不満など、私たちをとりまくプレッシャーには限りがありません。

そこで昔はあまり言わなかったけれど最近よく耳にする言葉「居場所」に私たちは目を向けました。人はどんなところに自分にとって快い場所を見つけているのか、心からくつろげる場所に出合っているのか、生まれてから育つ間にどんな「好きな場所」を持てたのだろうか。さまざまな設問も生まれます。

生まれたときからケータイがあつて、スマホがない生活など考えられない十代、二十代の人たちはヴァーチャルな世界とリアルな世界とを行き来しています。彼らにとっての居場所はどこで、どんな感じなのでしょう。

私たちはアンケートを試みました。同じく私たちの設問に協力してくれたのは上海で働く無印良品の仲間たちです。国は変わっても居場所は、誰もが心の大切なところにちゃんと置いてある記憶とも感じられました。

また社会的には弱者でもあるシニアや子どもたちに目を向けると、現実には「ここが私の居場所」とすっきり言えるような環境と出合えているでしょうか。高齢者の「その先」の居場所が楽しいグループホームでありますように。学校になじめないでいる子に、ありのままの自分でいいんだと迎えてくれるフリースクールがありますように。願望と取材と喜びがないまぜのページも誕生しています。

本号でとりわけうれしいのは、知の巨人でありながらユニークな活動を展開されている三人の方々が発言してくださったことです。「ゴリラと学ぶ」の山極壽一さん、地球の歴史から「長尺の目を」と説く鎌田浩毅さん、「建築史から茶室まで」の藤森照信さん。みなさんが考えを共にしてくださった特集・居場所。さまざまな局面から、居心地のよい場所の考察と提示ができることを願っています。



右／ゲームをする人、新聞を読む人、テレビを観る人……穏やかな雰囲気の中、誰にも強制されず、自分のやりたいことを。上／リビングにつながるオープンキッチン。利用者の希望を聞きながら献立をつくり、買い出しや料理も利用者と一緒にいきます。



リュックに手づくりの人形をぶら下げた高橋クミ子さん。デイケアに通いながら、週に一度、ここで手芸教室を開いています。

清山会のコンセプトは、「病院でも介護施設でもなく、居心地のよい家」。「人と居ながら、自由にできる」よう、一日のタイムテーブルはつくり、各自の自由意思で過ごしてもらいます。

あたりまえの生活を、あたりまえに

ウス、デイケアなどの施設を増やしていき、現在の清山会グループができました。ここでは、「その人に、何ができるか」ではなく、「その人と、何ができるか」を常に考えます。たとえば食事。体力のある人は買い出しや料理、後片付けなどもスタッフと一緒にやりますが、体力がない人は座ったままでもできる野菜の皮むきをするといった具合。老人もそれなりの役割を担っていた昔の大家族を見るようです。「料理は、私たちよりみなさんの方がはるかに上手ですから」というスタッフの言葉からは、経験豊かな人生の先輩をリスペクトする姿勢が伝わってきます。



乾杯で始まった、その夜の「居酒屋めぶき」。おかみさん手づくりの料理に加えて持ち寄りのお酒も並び、「ボトルをキープしています」という常連客も。

ひとりじゃない、という安心

「人生100年」といわれる、これからの時代。高齢や病気のために、以前の暮らしを続けられなくなることもあるでしょう。「その先」の居場所は、誰にとっても大きなテーマ。幸せな実践モデルがあると聞いて、宮城県の医療福祉グループを訪ねました。

その人と、何ができるか

清山会の運営する施設には、認知症の人も大勢います。でも実際にお会いしてみると、多くの人がそうは見えません。それはきっと、ごく普通に暮らしているから。歳を取れば転んだり食べものを喉に詰まらせたりというリスクは誰にでもある。認知症だからといって一律に自由を奪うのはおかしい、という思いから「それぞれの人の『できること』を奪わない」ようにしているからです。

こうした思いの背景には、精神科の医師である山崎さんの苦い経験がありました。以前に働いていた医療現場で、病気の人や障害のある人たちの行動を束縛するという現実を目の当たりにしてきたのです。「医療は水平ではない」「人を支配している」と感じた山崎さんは、「人を見下ろしたり、見下ろされたりしない」「脱専門家支配の場所」をつくりたいと思い、平成11年に「いずみの杜診療所」を開設。その後、グループホーム、ケアハ



診療所に隣接するリハビリのためのデイケアでは、卓球や麻雀などを楽しむ人も。同じ悩みを抱える人と出会い、語り合う場にもなっています。

また、こうした施設にありがちな建物の施設も、夜間以外はしていません。出入り自由ですから、入居者の家族が来たり、地域の人が来たり、スタッフの子どもが学校帰りに立ち寄りたり、夏休みに遊びに来たりと、それは賑やか。リスクを覚悟した上で、一緒に外出したり、人によつてはGPS機能付きの携帯を持ってもらったりしながら、個別に対応しています。「いくら建物が立派でも、食事がおいしくても、閉じてしまえば『施設』になる」「ここも施設ではあるけど、少しでも普通の暮らしに近づきたい」と山崎さん。それぞれの人が、それまでなじんできた地域とつながり続けることを大切にしています。実際、遠くでひとり

歩きしている入居者を見つけ、地域の人が連絡してくれることもあるとか。地域とのこうした関係が築けているからこそ、「普通に暮らす」ことも可能なのでしょう。認知症でよく問題にされる「徘徊」についても、「運動好きなお年寄り」ととらえれば、観方は変わる。水平な言葉の中で関係性が変わってくる」と山崎さんは言います。

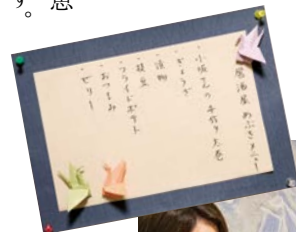
喜ばれることで、元気になる

取材にうかがったその日は、ちようどグループホーム「めぶきの杜」の居酒屋交流の日でした。二カ月に一度くらい行われるそれは、入居者のひとり、小坂美恵子さんの個室で開かれる定例の居酒屋です。

ご自宅でもホームパーティーを楽しんでいたという小坂さんが、「私の部屋で飲まない？」と他の人を誘ったのがきっかけとか。スタッフや他の入居者もお手伝いはしますが、基本的には「お



「居酒屋めぶき」の暖簾をくぐる、おかみさんの小坂さん。この暖簾も、家庭科の教員免許を持つ小坂さんの手づくりです。



この日のメニューは、小坂さんお手製の太巻き寿司、手づくり餃子、浅漬け、枝豆など。夜勤明けのスタッフも子連れで参加して、まさに大家族のような雰囲気です。



かみさんがつくつて」おもてなし。「お客」は、入居者をはじめ、入居者の家族、地域の人、スタッフ、スタッフの子どもなどで、元スタッフが子連れでやって来ることもあるといいます。

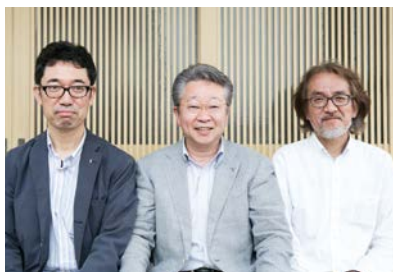
暖簾^{のれん}をくぐると、そこはもう別世界。「さ、どうぞ。遠慮なく食べてください」と声がかかり、あちこちで話の輪が広がります。4ページの写真も、実はこのときのワンショットです。

おかみさんの小坂さんは、茶の湯の師範でもあり、月に二度はデイケアに行ってお茶を点^たて、みんなにふるまったりもしているとか。好きなことを活かして人に喜んでもらい、そのことで自分もまた元気になれる。ここでは、そんな好循環がで

きているようです。

「誰でも、誰かに、何かに頼って生きている。それって、あたりまえですよね」―施設を案内してくださったスタッフ、鈴木みゆきさんの言葉です。「認知症は誰にでも起こりうること」「上から目線で馬鹿にされたり子ども扱いされたりしたら、誰だって悲しい。認知症になっていったって、同じだと思っんです」。老化や病気のために身体機能が衰えたとしても、その人の人間としての尊厳に変わりはない、と強調します。

このスタッフが利用者に対してやさしいのは、ひとりひとりの人を人間としてリスペクトしているから。そして、ここを利用する人たちの表情が穏やかで満足そうに見えるのは、そのことと無縁ではないでしょう。人は人として尊ばれて初めて、そこに居場所を見つけられるのかもしれない。



山崎英樹（やまざき・ひでき 中）

小林 忠（こばやし・ただし 右）

菊池 保（きくち・たもつ 左）

「いずみの杜診療所」の立ち上げ以来、同じ志で山崎さんを支える小林さん、菊池さんと。山崎さんが以前の病院を辞めるとき、行動を共にしたという。

小さな空き地に目をやれば

東京の副都心のひとつである池袋には、大規模な公園がありません。だからこそ、ふだん気にも留めず通り過ぎている場所を

ちよつとした工夫でいきいきとした居場所に変えていこうと試みています。

空き地というのは不思議なもので、なんにも使われないまましていると、土地そのもののエネルギーがしぼんでいくように感じます。それはあまりにもつたいない。東京都豊島区は「わたしらしく、暮らせるまち。」を合言葉に、区内のさまざまな場所を、行政だけでなく、そこに住んでいる人や企業と一緒に活性化させる取り組みをすすめています。

そのひとつが、区内の遊休地などを活用する「農縁公園プロジェクト」。東池袋の約50㎡という小さな用地をプランター菜園にすることで、空き地が農地に変身です。近所に住む人たちと一緒に伝統野菜の雑司ヶ谷ナスの苗を植え、無事収穫したそうです。もいだナスは、もちろん近所のみなさんにもおすわけ。

「小さな公園活用プロジェクト」も行っています。豊島区には大きな公園はなく、小さな公園や児童遊園が点在しています。が、あまりうまく活用されていないところもあるというのが現状です。遊んでいる

子どもや憩う人たちがいないと、公園という認識も薄れてしまい、さらに人が集まりにくくなる……。東池袋にある日出町第二公園もそういう存在でした。でも公園を整備するとなると、時間はもちろん、お金もかかります。そうではなく、「いまある場所のあり方を変えてみる」ことを試みました。それがマルシェ「HINODE MORNING MARKET」です。

実はこの公園は、タワーマンションが建つ新興エリアと、商店街や木造家屋が密集した古くからのエリアの中間に位置しています。その、新旧の住民たちが出会う場所になればという期待も込めたプロジェクトに、地元のショップが応え、老舗も新顔も参加しました。マルシェを開催したことで、ここが公園なのだとあらためて認識され、新たな交流も生まれていく。都会の小さな場所が、ちよつとしたきっかけで居場所になる。定期的に開催できたら、暮らしやすさにもつながる。課題とヒントがここにありそうです。



人通りの少ない公園は、無意識のうちに足が遠のいてしまうもの。大きく手を加えることなく、人が集えるようにという発想から生まれたマルシェです。

徐晨欣子さん 浙江省麗水市 出身

徐晨欣子さんが子ども時代に好きだった場所は、家のすぐ近くにあった「白雲山」。平日の夜は家族と一緒に麓を散歩し、週末は友だちと連れ立って山歩きをしました。山頂から見下ろす街の全貌、おいしい空気、夏の涼風……山苺の生える4月5月は、特に好きな場所になりました。故郷を離れて上海でひとり暮らしをしている今、もっともくつろげる「居場所」は、自分の好みで飾った自分の部屋。仕事を終えて、ここで誰の目も気にせず頭を空っぽにすれば、面倒なことは忘れられます。



劉仲明さん 上海市 出身

上海生まれの劉仲明さんが幼稚園の頃好きだった場所は、「遊園地の片隅にあった玩具屋」です。古びた建物でしたが、そこは子どもたちのパラダイス。ギューギューに並べられた玩具が、プラスチック包材の中でまぶしく輝いていました。大人になってからは、やわらかな灯りとコーヒー、軽食、本があって、換気の良いところが、いちばん快適な場所。道端のカフェや郊外の書店、公園のあずまや、混雑していないパブリックスペースなども好きな場所です。友だちとおしゃべりしてもいいし、ひとりで本を読んだり、仕事をするにもいいと言います。

羅丹さん 陝西省西安市 出身

好きだった場所として、「学校」をあげたのは羅丹さん。早朝から夜遅くまでの学校生活は楽ではなかったけど、高校生という感受性豊かな年頃にクラスメイトたちと一緒に過ごし、学んだことが素晴らしい思い出になった、と言います。今でも、学校の前を通りかかると、緑いっぱいの並木道を懐かしい気持ちで見ると。そして今は、住んでいる部屋に着くとホッとする生活。メールの返事をしなくてもいいし、喋らなくてもいい。誰にも邪魔されず、本を読んだり、音楽を聴いたり、映画を観たり、勉強したりできるのがいいと言います。「ひとりの時間」が持てることも、居場所の大切な要素なんですね。



彭笑さん 湖北省武漢市 出身

「おばあちゃん家の蓮池が大好きだった」と答えたのは、彭笑さん。柳と蓮が芽を出して生命力に満ち溢れる早春。遊び仲間とおたまじゃくしを捕まえ、疲れたら竹ベッドやハンモックでひと休みした夏。満潮時に川岸まで寄ってくる魚を、すくい網だけで獲った初秋。蓮池で蓮根刈りをする職人で賑わい、採れたての蓮根が路地に並ぶ冬……どの風景も心に刻み込まれていて、彭笑さんの原風景となっているようです。働き始めて7年たった今、リラックスできるのは、上海の自分の部屋。そして、連休のときに帰省する実家は、やはりどこよりもリラックスできる居場所です。

わたしの好きな場所

蘇子晗さん 湖南省長沙市 出身

蘇子晗さんにとって、大学のキャンパスは子ども時代の楽園でした。小学三年生以降、両親の元から離れ、中南大学鉄道学院のキャンパス近くに住む祖父母と一緒に暮らした子ども時代。都心に比べて自然豊かなキャンパスでは、クローバーやヘビイチゴ、マルベリー、パッタなどが友だちでした。ゲームやSNSの代わりに、このキャンパスが謎めいたランドのように、探索の楽しさと驚きを与えてくれたのです。そして今は、上海という街そのものが蘇子晗さんの居場所。インフラが整い、交通も便利で、治安も比較的良好いこの街だから、快適に安心して暮らせると言います。



張猛さん 黒龍江省ハルビン市 出身

「お休みの日は、食事と寝る時間以外はずっとスーパーの裏庭にあるミニ四駆の立体コースに居た」と子どもの頃を振り返るのは、ハルビン市出身の張猛さん。ゲームに参加したり、横で観覧したり、仲間同士でミニ四駆の組み換えについて熱論を交わしたり、アニメの内容について語り合ったりしました。そんな熱い張猛さんが、今快適に感じる場所は、バスケットのコート。週に1〜2回はコートに行き、働いた後のストレスを解消します。体も鍛えられるし、見知らぬ人とコミュニケーションするのも面白い。何より、地面にボールが当たって弾ける音に青春を感じ、未知のことに向かうパワーをもらえる気がするそうです。

そこに居ると、安心できる、
楽になる、充実感をもてる……
「居場所」には、さまざま意味があります。
ひとりの人の中でも成長につれて
居場所は変わるでしょうし、
幼い頃の居場所が原風景となり、
その後の人生に影響を与えることだって
あるかもしれません。
今回は、上海の無印良品で働く人たちに
子どもの頃に好きだった場所と、
大人になった今、
快適に感じる場所を聞いてみました。

魏書哲さん 福建省三明市 出身

緑豊かな福建省出身の魏書哲さんは、子どもの頃のお気に入りの場所を、「川辺の芝生、おばあちゃんの家や菜園と近くの山」と書いてくれました。門前には町を貫く川が流れていて、夏の夕方になると、うちわと竹椅子を持って川辺で夕涼みをしたとか。菜園と近くの山には、春は野苺、夏にはとうもろこしなど、いろんな作物が育っていたそうです。そんな原風景があるからでしょう。今でもホッとできる場所は、山と川のあるところ、緑が多いところ。上海の生活はコンクリートに囲まれていて、見える緑は道端の木や団地の小草だけで、青空はもっと贅沢なものになりました。それだけに、山水のある風景を見ると、快適になるし、心が落ち着きます。

陳西濃さん 福建省寧徳市 出身

島で生まれ育ち、海に飽きたことがないという陳西濃さんは、特に夏の海が大好きでした。海に出た漁船が戻ってくる夕方、石の椅子に腰かけて夕涼みするお年寄り、電線にとまるスズメ、アイス棒と冷茶……それらすべてが夏休みの記憶として、心に刻まれています。だから、上海で暮らす今も、川辺が好き。家の近くの川辺に行くと、故郷と同じ葦が生えていて、川辺の木の倒影が水面に映り、釣りをするおじさんもいて、懐かしい気分に。夏の夜、少し涼しくなったら、スイカを抱いてここに来て、セミの鳴き声を聞きながら、お散歩中のファミリーや行き交う車を見ていると、なんだか落ち着くのだそうです。やっぱり、自然の傍がいいんですね。

曹堃さん 安徽省銅陵市 出身

子どもの頃は、「天井湖公園」が好きだったという曹堃さん。三つの湖があり、緑が多く、遊具施設もあって、家族や友だちとゆったり、まったりできるところでした。現在のお気に入りには、「楊浦自治区大学道」。復旦大学と上海財政経済大学の間にある学生街です。両サイドのカフェでは、たくさんの学生や講師が読書をしたり議論したりしていて、アカデミックな雰囲気。ショップやレストラン、プライベートシアターもあり、露店の休憩所が多いので、のんびりできるところも気に入っています。「天井湖公園」で家族や友だちと過ごした幸せな時間と重なるのかもしれないね。

唐崧恒さん 重慶市 出身

平地の少ない川沿いの町で育った唐崧恒さんは、町の中の広場が大好きでした。コンパクトな広場でしたが、ビニールづくりの簡易屋台があって、その中には食べもの屋、ビリヤード屋、ゲームセンターも。夕飯の後、その広場に行くのが子どもの頃の楽しみでした。そこには大好きな友だちが居て、おいしいおやつや面白いおもちゃなどがあったからです。そして今は、仕事が終わったら一刻も早く帰りたいほど、自分の部屋でくつろぐのが好き。ソファに寝転んでボーッとしたり、テレビを観たり、ルームメイトとおしゃべりしたり。たまに料理をして友人を招くのも、この部屋です。



まなざしから生まれる居場所

神奈川県川崎市が運営する「川崎市子ども夢パーク」。その敷地内に学校に通っていない子どもや若者たちの居場所があります。全国でも珍しい「公設民営」の形で営まれている「フリースペースえん」の取り組みを取材しました。



ご飯をみんなでつくってみんなで食べるを通して、子どもたちは「暮らしの主体」を取り戻していきます。



2003年に完成した「川崎市子ども夢パーク」。子どもの意見を取り入れて、工場跡地の広い敷地にみんなの夢を実現しました。

「夢パーク」の敷地はおよそ一万㎡。泥遊びや穴掘り、秘密基地ごっこやたき火などができる子どもの樂園です。この一角に「フリースペースえん」があります。学校に行かない、行けない、障害や病気があるなど、さまざまな背景を持つ子どもや若者たちが通う居場所です。「えん」には決まったカリキュラムがありません。いつ何をするかは自分次第。部屋でゲームをしたり、楽器を弾いたり、スポーツをしたり、外遊びをしたり、一日中、好きなことをやって過ごしています。

「えん」では、お昼ご飯をみんなでつくって食べます。同じ屋根の下でワイワイ食べる楽しい時間。「こうして見ていると、誰が障害者だなんてわからないでしょう」と言うのは、施設を管理・運営するNPO法人「フリースペースたまりば」の西野博之さん。子どもたちはご飯づくりを通して、「自分でも料理ができた」と自信を持ち、誰かに感謝したり、されたりすることで「ひとりじゃないんだ」ということに会っていきます。

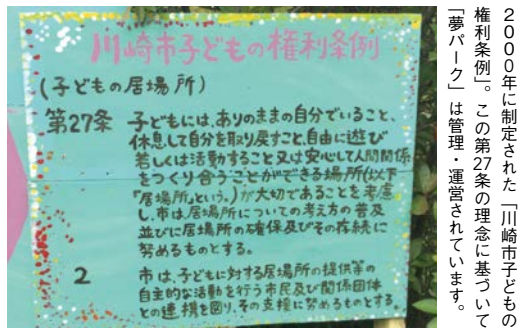
大切なのは、子どもが「遊びと暮らしの主体を取り戻す」こと。勉強も遊びも、いまの子は大人が与えたものを消費するだけ。それが子どもの「自尊心の低さ」につながっているといえます。だから、「夢パーク」にある遊具は、ハンモックもウォータースライダーもみんな手づくり。修理も自分たちで。「子どもが自分たちの遊び場を自分たちでつくっている」ことに着目し、全国の自治体をはじめ、ユニセフや韓国、中国、ドイツなど、世界からも視察団が訪れています。

生きてるだけでOKなんだ

塾の講師をやっていた西野さんが不登校の子ど

もの居場所「たまりば」を始めたのは1991年のこと。学校に行けなくなった小学校一年生の男の子が「僕はもう大人になれない」と大粒の涙を流したことがきっかけでした。不登校が原因で母子心中を図ったケースも。「不登校は命がかかっているんですよ。子どもはそれだけ追い詰められる。僕がこの仕事を続けているのは、救えなかったいくつかの命があるからです」。以来、「生きてるだけでOKだ」と思える居場所づくりが、西野さんのライフワークになりました。

でも、当時はまだ「不登校」が許される時代ではなく、周囲からは白い目で見られました。変化が起きたのは7年目のこと。文部科学省から「居場所」で過ごした子のその後を調査せよとの依頼



2000年に制定された「川崎市子ども権利条例」。この第27条の理念に基づいて「夢パーク」は管理・運営されています。



西野博之
(にし の・ひろゆき)

NPO法人フリースペースたまりば理事長。川崎市子ども夢パーク所長。フリースペースえん代表。早稲田大学非常勤講師。『居場所のちから』（教育史料出版会2006）ほか著書多数。

「そもそも子どもが何もしなくていい場所がなくなってきた」と西野さん。「人生を長い目で見れば、何もしない「いま」も大切な時間です。居場所とは、安全・安心が保たれた、ありのままの自分でいられる場所であり、関係性のこと。それをつくるのは、その場にいる人の「まなざし」です」

その温かなまなざしに見守られ、「夢パーク」には今日も元気な子どもの声がこだましています。

大人の洞穴、茶室

小さいのに広がりがあった、堅苦しそうで実は自由で。茶室はなんとも不思議な場所です。その居心地のよさは、大人になってこそ気づけるもののようです。

数多くの茶室を手がけてきた藤森照信さんに、その面白さと魅力を語っていただきます。

お茶の文化は鎌倉時代に中国から入ってきて、16世紀後半、千利休によって一気に変革しました。それまでの茶室は四畳半四つぶんの十八畳に始まり、八畳、四畳半と縮まってきました。それを利休が「待庵」で二畳にまで狭めた。この、狭いことと閉じていることが、いまに通じる茶室の大切な要素となっています。

そもそも茶室は、うんと広い敷地のうんと立派な屋敷の、ちょこつと隠れたところにつくられるものでした。全体の面積からしたら、ケシ粒のようなもの。それが、ふだんはギンギンの御殿にいるお殿様たちにとっては居心地がよかった。動物の「巢」に近いんじゃないかな。動物の巢でそんなに広いのはありませんから。

閉じるというのも、利休がしたことです。茶室から外は見えない。外からも茶室の内部は見えない。

見せることを、利休は徹底して許さなかった。だから茶室に人がいる様子がわかる外からの写真ではありません。少なくとも私は見たことがない。

うるさいことは本来言わない

でも、私が設計した茶室には、大きな開口があるものも多いです。でも面白いもので、広い窓があるから外を見るかというところ、そうでもない。私自身も茶室をつくって、そこに路上観察学会の仲間たちと行ったりするけど、誰も外なんか見ません。茶室にいるとなんとなく気持ちよくなつて、4時間くらいあつという間にたちます。さすがにそれ以上いると飽きますが（笑）。この4時間というのは、本式の茶事にかかる時間と同じです。親しい間柄であつても、狭い場所に一緒にいら

る時間の上限なのかもしれませんね。

茶室という決まりごとや格式にしばられているというイメージがある人も多いけれども、うるさいことは本来言わないのが茶室なんです。だって利休はそこで拾ってきた材料でつくってるんですから。自分でつくれば人件費もかかりません。写真の「矩庵」はお寺の奥にある茶室ですが、ここは住職が本職の木工並みの腕を持っていて、施工から細かい仕事まですべて自力。図面も引かずにすめました。地面から生えているみたいで、塀にくっついていて感じる感じがいいでしょう？

生えているように見える木は栗で、私の故郷、長野県茅野の山から伐り出したものです。想像を絶する重量で、半分からいに削りました。蹴り口への梯子も同じ栗で、二股のものを真ん中で半分に分けて梯子に仕立てています。栗は私自身とても好きなんです。まずかたがいがいいし、腐らないのもいい。適当に曲がついているのもいいところ。針葉樹があまり好きじゃないんです。杉、松、檜、みんなまつすぎるし、木目もきれいすぎます。木の原形である針葉樹からすれば、広葉樹はなにが悲しくてこんなにクネクネしているんだって話ですけどね。

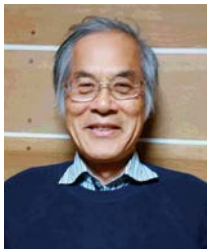
やっぱり自然材料が好きですよ。近代建築は構造物材をそのまま見せるという大原則があつて、コンクリート打ち放しなどはそこから生まれました。でも周辺の環境となじませるのには、私は自然材料を使いたい。だからコンクリートの上に、木や

ら石やらを、服のように着せるんです。大事なものは本気で着せること。本気で着せると、あんまり変じゃないんです。中途半端はいけません。ただし例外は土で、これは手を出さない方がいい。誰がやっても土は土。表現にならないんです。

お茶より心地よさのため

これまでにたくさんさんの茶室をつくってきました。もちろんそこでお茶を飲みたいという人もいますが、希望としては「小さい空間が欲しい」。茶室の誕生以来、人間の変わらぬ欲求なのかもしれない。特に海外の人はそうですね。日本に茶室という変なものがあるというのを知っている人は多くて、自分の生活のなかにも、ちよつと異質な、小さな空間をつくりたいと思われるようです。

茶室はいいですよ。私もお茶のことはわからないのに、人の茶室を設計していたらたまらず欲しくなつてつくつたくらいですから。ああいう場所が、ひとりにひとつ、あるといい。大人にとつての、現代の洞穴みたいなものかもしれません。



藤森照信
(ふじもり・てるのふ)

1946年長野県生まれ。東京大学大学院博士課程修了。近代建築、都市史研究の第一人者として活躍。86年、赤瀬川原平、南仲坊たちと路上観察学会を結成。建築家としても作品を多数発表。

地球丸ごとふたりで

「決まりきった日常よりも、愛車で寝て冒険を続ける毎日が最高！」
30年以上にわたって186カ国を旅してきたふたりの住まいは「地球」です。
次はどこへ行くのか、なにに出合えるか、楽しみは尽きません。



スイス人のリリアナ・シュミットさんとエミール・シュミットさん夫妻が旅を始めたのは1984年のこと。結婚してから15年間はチューリッヒに住み、ふたりで一所懸命働き、ビジネスにおいて成功も収めました。共に築いた資金を元に、終わりのない旅に出たのです。以来、どこにも居を構えることなく、愛車のトヨタ・ランドクルーザーに乗り、見知らぬ土地を訪れ続けています。

「私たちにとって、旅は単なる移動ではありません。愛車という我が家です。くつろぎながら、初めて目にするものや土地の人たちに触れ、新たな冒険に向かっていく、かけがえのない時間なのです。そしてランドクルーザーは自動車という存在を超えて、壮大な旅の大切な一部となっています」

ふたりにとって自動車は、移動手

日本は、1999年の7月から9月にかけての約2カ月にわたって滞在しています。最初に着いたのは神戸でした。梅雨空のなか、伝統的な木造住宅を見たり、盆栽に感嘆したり、青々とした田んぼに心落ち着かせたり。そして四国の奥深い山道を走り抜け、富士山の麓で食事を堪能し、渋谷では赤提灯に興味津々だったとか。日本にいる時間はとても心地よく、そして身の安全を感じられたそうです。

旅なのだけれども ふたりには日常

渡り鳥だつてある一定のルートで飛んでいるというのに、日々「次はどこへ行くのか」と考えているおふたり。落ち着きたいと思ったことはないのでしょうか。

「その質問には自信を持ってお答えしますよ。ノーです！ 私たちはふたりとも、冒険が好きで、驚きが好きで、未知のものが大好きです。毎日決まったことは望みません。そして多くの国や地域において、定住するのはとても難しく、複雑な手続きが必要になりますね。」

段であると同時に、ともに旅する仲間のようなものなのでしょう。五大陸すべてに行つたシュミットさん夫妻が、これまでいちばん長く過ごしているのはアメリカです。

「何回かに分けて行っているのですが、合わせることは2年間はアメリカにいたことになります。ハワイとグアム以外の州はすべてまわりました。アメリカには広大な国立公園がたくさんあります。あれだけ広い国ですから、公園によって砂漠あり、山あり、滝ありと趣が異なり、そのどれもが素晴らしい。アメリカを訪れては、自然と自由を満喫し、喜びを感じています」

その土地で暮らす方々の伝統的な生活を垣間見ることができるのも、楽しみのひとつです。さまざまな文化があることを、肌で感じます。そして土地のみなさんが日常食べているものを口にするのは、毎回新鮮な経験です」

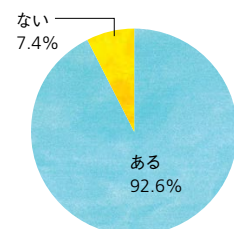
ふたりが過ごしている時間は、私たちにとっては「旅」に見えるけれども、ふたりにとってはごく普通の日常です。だから訪れる土地と、その土地に暮らす人々に、すんなり溶け込めるのでしょう。いつかは世界一周を。そう思っている方は、ぜひシュミットさんのサイトを見てみてください。「いつか」を「いつも」に変えたふたりにとって、地球すべてが居場所であり、我が家なのだということが伝わってきます。



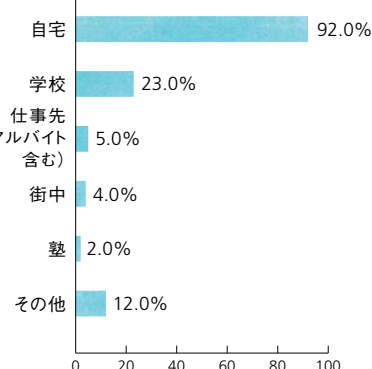
10代の居場所はどこに？

パソコンやスマートフォンが登場し、ＩＴが暮らしの中に入ってきて、人々のライフスタイルは大きく変化しました。こんな時代に、若い人はどこに居場所を見つけているのでしょうか。ふと気になり、10代の人の本音を聞きたくて、MUJI passportでアンケートを取ってみました。

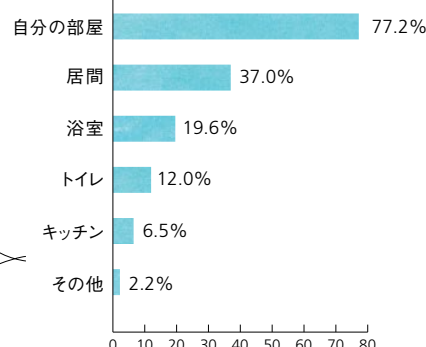
A 1 毎日の中で、落ち着けたり、居心地がよいと思える場所がありますか？



A 2 「ある」と答えた方におうかがいします。その場所は以下のうちどこですか？ (複数回答可)

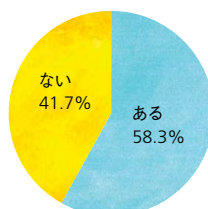


A 3 「自宅」と答えた方におうかがいします。その場所は自宅の中のどこですか？ (複数回答可)

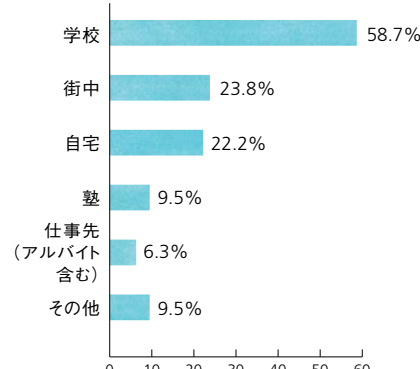


自分の部屋に居心地のよさを感じている人が多いみたい。ひとりの時間を大切にしているのでしょうか。

B 1 毎日の中で、居るのがいやに思える場所がありますか？



B 2 「ある」と答えた方におうかがいします。その場所は以下のうちどこですか？ (複数回答可)



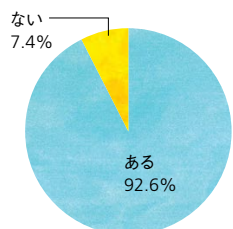
「その他」の中には「電車」「満員電車」「部活」などがありました。

今回のアンケートに回答を寄せてくださったMUJI passport会員の中で、10歳から18歳までの方は108名でした。そのうちの9割が15歳〜18歳で、うち7割弱が高校生でした。男女比は女性が75%、男性が24%、1%の方がどちらでもないと答えました。

まず尋ねたのは「居心地がよいと思う場所があるか」について。結果9割以上が「ある」と答え、その中の多くが「自宅」と答えています。自宅の中でも「自分の部屋」がいいという人が多く、2位の「居間」を上まわりました。家族と過ごすより、自分の部屋に居る方が心地よいと感じているようです。浴室やトイレに居場所を見いだしている人もいました。また、「その他」と答えた人の中には「彼氏の隣」「彼の部屋」という回答もありました。

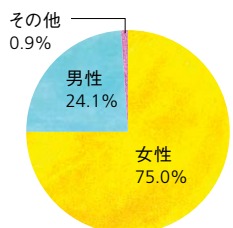
逆に「居るのがいやに思える場所はあるか」を聞いてみると、6割近くの人が「ある」と答えました。いやな場所の筆頭は「学校」で、その後に「街中」「自宅」と続きます。「その他」のいやな場所では「電車」「満員電車」という回答がありました。

いつか行ってみたい場所がありますか？



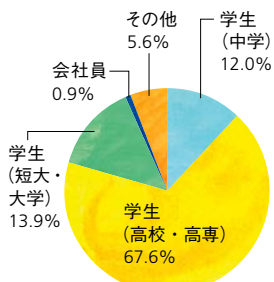
約7割の人が「海外」に行きたいと答えました。

あなたの性別



今回の回答者の4分の3が女性でした。男性に聞いてみると、少し違った結果になるのかもしれない。

あなたの職業



自由回答で「何をしているときに楽しいですか」を聞くと、「友だちと話しているとき」や「音楽を聴いているとき」が多く、次いで「部屋に居るとき」「趣味」などでした。

スマホやタブレットを使っている時間を聞くと、「3〜6時間」が半数近くを占め、次いで「1〜2時間」、少数ですが「起きている間はずっと」という回答も。使い道は「SNS」が最も多く、「検索」「動画を見る」「ゲーム」の順でした。

アンケートの全体を振り返ると、「ひとりでいる場所や時間」を大切にしている若者像が浮かびあがってきます。自宅の部屋でくつろぎながら、スマホを使ってSNSで連絡を取ったり、音楽を聴いたりしているひとときに居心地のよさを感じているのでしょうか。ゲームの時間が少ないのは、回答者の7割が女性だったからかもしれません。

対象が無印良品のお客様という限定つきですが、アンケートの結果、友だちや家族と適度に付き合いなから、自分ひとりの気ままな時間を大切にしている10代の暮らしぶりが垣間見えたような気がします。



取材にうかがった日は、年に一度の地区全体の清掃日。集落の人と一緒に川沿いの道を歩きながら、ゴミ拾いをしています。



元小学校の校舎を再利用した共生舎。住民の数9人、平均年齢80歳以上という限界集落で、10代から30代の若者、十数人が共同生活をしています。

自分らしく、居られるところ

携帯電話の電波も届きにくい和歌山県の山中。限界集落と呼ばれる土地で、廃校になった校舎をシェアして共同生活をしている若者たちがいます。何も無い、一見不自由なそこを、彼らが「居場所」とする理由は、何でしょう？

紀伊田辺駅から車で約一時間半。山懐に抱かれて、若者たちの「居場所」はありました。引きこもりだった人、ニートだった人、疲れ果てて学校や会社をやめた人、家に居場所がなかった人……現代社会の中で生きづらさを感じてきた人たちが、競争社会から離れて、互いを尊重しながら共生する社会を目指す「共生舎」です。

ルールで縛らない、というルール

共生舎の理念は、「それぞれの立場の人がお互いに個性を認め合い、助け合って生きていく」と。食費や光熱費などの拠出を除いて、これ以外のルールは特にありません。生きものが相手の鶏の世話だけは一応担当を決めています。夕食づくりも、食器洗いや掃除も、「当番」はなし。「ルールをつくると、それに従わなければならないというプレッシャーが出てくるし、従わない人がいるというイライラする人も出てくる。だから、気づいた人が、その気になった人が、やればいい。誰もその気にならなかったら？ そのときはやらなくていいんです」。何とも、おおらかな生活です。

暮らしにかかる費用は、食費や光熱費をひくくめて月に2万〜3万円程度。地域の人たちから物の直売所に出品するため、敷地内に農産物加工所を建築。石井さんはラー油を商品化したいと考えていて、「ニートが油を売って、ちよつといいでしょ？」とおどけてみせます。

そんな石井さんですが、今でも「外の世界がまったく平気」というわけではなくて、自分のことを「集落内引きこもり」と呼びます。「集落の人たちとは何かやっついていけるけど、これより広い世界に出たら、どうなるのかはわからない」と。その意味で、都会から遠く離れ山に囲まれたこの集落は、共生舎で暮らす人たちにとって、母親の胎内のように安心できる場所なのかもしれません。

強制されずに、共生する

中には、2週間の予定で訪れ、「居心地がよくて」そのまま居続ける人もいます。その「居心地よさ」は、どこから来るのでしょうか？

石井さんに聞くと、「居たいなら居られる、嫌ならいつでも帰れる気楽さ」がありながら「近くに誰かが居る安心感」という答えが返ってきました。ここなら、DVDや動画配信サービスを観て



上／それぞれが好きなことをして過ごすリビング。広々としたスペースでお互いを尊重し、ほどよい距離感が保てます。左／共生舎の畑でニンニクを収穫する石井さん。集落の人からは「周囲の野原も畑にしたいよ」と言われているとか。



石井 新
(いしい・あらた)
1988年生まれ。共生舎の募集に応じて2014年3月から移住するが、創設者である理事長の死に伴い、理事として自主運営に参加。限界集落での暮らしの楽しさをブログで発信し続けている。

人類の居場所、地球について

考えてみれば、いま私たちがこうやってここに居られるのは、地球という居場所があるからです。人類のふるさと、地球がどうやってできたのか。いつまで私たちはここに居られるのか。



鎌田浩毅
(かまた・ひろき)

1955年生まれ。東京大学理学部卒業。京都大学大学院人間・環境学研究科教授。専門は地球科学。京大の講義は毎年数百人を集める人気で教養科目1位の評価。著書に『地球の歴史』（中公新書、上中下）ほか多数。

「太陽系が誕生したのはいまから50億年前のこと。そこから宇宙空間に漂っていた岩石や氷、チリが集まって地球になったのが46億年前」という壮大な歴史から鎌田さんの話は始まりました。

水星、金星、火星、木星などの惑星ができるなか、地球にとって幸運だったのは、生命を育む大量の水があつたこと。水は0℃で凍り、100℃で沸騰します。水が液体の状態でいられるためには、気温が0℃と100℃の間でなければなりません。太陽に近い金星は熱すぎて、遠い火星は寒すぎる。偶然太陽からほどよい距離にあつたために、地球は生命を宿すことができたのです。

その地球に最初の生物が誕生したのは38億年前のこと。バクテリアのような単細胞生物から手足が出てきて、脳ができ、やがて人類にまで進

化してきました。「でも、38億年前に生命が生まれて、それが一度も途絶えなかつたのは、実はすごいことなんですよ」と鎌田さん。「地球の生物は何度も絶滅の危機を乗り越え、ここまで生きてきたのです」

絶滅を生き残った者たちが次代の地球の覇者になった

「古生代」「中生代」「新生代」という言葉を私たちは理科の授業で習います。「生物の代」と書くのは「代」によって生物の種類がガラッと変わるため。なぜ変わったかというところ、その境目で生物が絶滅したからです。たとえば、古生代は6億年前に始まりましたが、2億5千万年前に生物の95%が死滅する大惨事が起きました。そして、生き残ったわずか5%の生物が次代の覇者、恐竜となつて進化していったのです。

その恐竜もいまから6500万年前に、巨大隕石が地球に落ちてきて絶滅しました。高さ300mの大海波が陸を襲い、飛散したチリが日光を遮って極度の寒冷化に向かつたそうです。その過酷な条件下で生き延びたのがほ乳類で、それが新生代の覇者となつて繁栄したのです。

「ひとことと言うと、地球の歴史は想定外の繰り返し。生物は絶滅します。でも、全部は死なない。必ず生き残る者がいて、それが次代の覇者になる。それを繰り返してきました。だから、僕たちは生きているだけでありがたいと思わなくちゃいけない。完全に絶滅したら、僕らはここに居ないから。だから、我々は全員38億歳なんですよ。38億歳プラス20歳とか、38億歳プラス40歳とか。それが我々がいま『地球』という居場所に居る意味なんです」

大地変動の時代に入った私たちの居場所、日本列島

「日本列島は7年前の3月11日に、マグニチュード9の大地震に見舞われました。このクラスの巨大地震が起きたのは平安時代以来、千年ぶりのこと。この地震で日本の地面は東西に5mほど引き延ばされ、それが元に戻っていく過程で、いま地震や火山の噴火が増えています。日本は千年に一度の『大地変動の時代』に入ってしまったのです」

と、これだけ聞くとちよつと怖くなりますが、「大丈夫」と鎌田さん。日本はこれまでに幾度となく大地震に見舞われ、その度に復興してきました。これは西洋にはあまりないことで、日本人は揺れる大地の上で上手に生きる術を知っているのです。火山研究も日本は進んでいて、地下のマグマが動くときに起きる地震や地殻変動を観測することで、ある程度、噴火の予知はできるとか。

「科学の力で予知できれば、前もって避難できるし、被害に遭わなくて済むでしょう。自然災害の多い国ゆえに発達した『智慧』により、私た

ちは災害を未然に防いだり、大幅に減らしたりできるので」

日本は石油や石炭などの資源もなく、地震が多くて、火山が噴火して、台風も来る。居場所としてはかなり不利な条件です。でも、その中で何を拠り所にして生きてきたかというところ、それは「人」。そう、人が学んで、知識を付け、賢くなることで、悪条件を撥ねのけて発展してきた国なのです。国土が狭く、地震が多く、資源がないゆえに発展できたというのは、面白い視点だと思いました。

「長尺の目」を持って自分たちの居場所を考える

「地球のような巨大なものを考えるときは、『長尺の目』といって、大きなスケールで物事を見る必要がある」と鎌田さんは言います。たとえば、短期的に見ればCO₂の増加で地球は温暖化に向かっていますが、長尺の目で見ると逆で、むしろ寒冷化に向かっているとか。「過去は未来を解く鍵」といいますが、過去の温度変化を見ていくと地球は氷河期に向かっているようです。このように、物事は常にマクロ・ミクロの両

方で見ることが大切だといえます。

今後、地球がどうなっていくかを尋ねてみると、「太陽はどんどん大きく熱くなつていき、10億年後には地球の水は干上がつてしまします。それまでに人類は別の星に移住しなくてはだめですね」という答えが返ってきました。いま、世界中で系外惑星の探査をやっているのは、太陽系の外に地球のように住める星があるかどうかを探っているのです。「不動産の物件探しと同じで、将来人類が引越していい場所を探しているんですね。10億年後には家を出ていかなきゃならないから」と、笑つておつしやいました。

住む家を探すとき、明日の暮らしを考えることも大切ですが、子どもが大きくなつた日のことも視野に入れる必要がありますね。「長尺の目」で考えるとは、そういうことでしょう。いま現在の居心地を考えるだけではなく、もつと長い目で物事を見つめることの大切さを、地球科学の話を通じて鎌田さんに教えていただきました。私たちが「居場所」を考えるうえで、大きなヒントをいただいたような気がします。



見方を変えると場所が変わる

不思議なもので、目の前にあっても関心がないものは見えてきません。それは場所でも同じこと。違った角度から見えてみることで、思いもよらない新たな風景が目の前にあらわれてくることがあります。

大好きな場所でも、ずっと同じところにいるとその魅力を感じなくなったりします。逆に第一印象は特に強くなかったのに、時間をあけて再訪してみたら気持ちを揺さぶられるようなこともありませんか？ それは場所そのものが変化したのではなく、私たちの気持ちや考え方、感じ方が変わるために起きること。

「意識が変われば、見えるものも変わり始めます。それは同時に、見えているものが変われば、意識が変わり始めることでもあるのです」と言うのは、ランドスケープデザイナーでアーティストとしても活動しているハナムラチカヒロさんです。

見方を固定せずに自由にできたら、私たちの生活はどんな創造的になれるはず。それまで見えていなかったもの

そうです。

「病院という場所は、見る側と与えられる側という関係も、患者同士の関係も固定化してしまいがちです。積極的になにかができるわけでもなく、誰とも話すことなく時間が過ぎてしまう。アートの触れることもなかなかありません。でも美術館に行けないからアートが不要なわけではなくて、必要としている人はたくさんいるはずです」

病院という場所で、さまざま



6階から18階まである大きな空間なのに、人々の意識にのぼらなかったこの場所を、ハナムラさんはアートの力で変えてみせました。

を見えるようにするために、見方を変えるきっかけをつくる方法。ハナムラさんはそれを「まなざしのデザイン」と呼び、数々のアートプロジェクトやワークショップを実践。固定化されたまなざしに揺さぶりをかけています。その内容は『まな



まな制約によって固定化されてしまった見方を、ハナムラさんは変えたかった。そこで光庭を霧で満たし、その霧が少しずつ晴れてくると、今度は大量のシャボン玉を落下させました。始まりから終わりまで、わずか30分のできごとです。

地球が居場所と考えられたら

インスタレーションの始まりが館内放送で告げられると、多くの人が廊下に出てきました。患者さんはもちろん、看護師、医師、職員も、仕事の手をふと止めました。さまざまな立場の人が、その関係性から放たれて、霧とシャボン玉で満たさ

ざしのデザイン（世界の見方）を変える方法』という書籍にもなっています。

美術館に行けないからこそ

無数に舞い降りてくるシャボン玉を、一心に見つめる子どもたち。そのまわりにいるユニフォームを着た大人も見入っています。ここは病院です。大阪市立大学医学部附属病院の職員とハナムラさんの共同によるインスタレーション「霧はれて光きたる春」です。大きな入院病棟の、6階から18階を貫く光庭は、敷地の中央に位置しているものの、なにかが行われることはないがゆえに誰も気に留めない場所であり、「敷地を活用して病床を増やせばいいのに」という声も上がっていた

れた光庭を見つめました。それまで何カ月もベッドに寝たきりで天井しか見ていなかった人も、慌ただしい時間のなかで光庭の存在など気にもかけなかった人も、大切な人の看病で心が折れそうになっていた人も。

このインスタレーションは、2010年から2年ごとに3つの病院で実施されました。30分間だけ見ることのできる、いつもとまるで異なる風景つかの間、自分の置かれた状況を忘れられたかもしれませぬ。これからのことを考えるきっかけになったかもしれない。そして、多くの人の「まなざし」を変えたのだと思います。

「場所について考えるとき、人が欠かせません。誰かがいることで、場所は居場所になる。そして場所が人をつくるのでなく、人が場所をつくる。地球すべてが自分の居場所だと考えられれば、コミュニケーションのあり方も変わるのではないでしょうか」。場所に固執しすぎることなく、自分のまなざしを柔軟に変えてみる。日々の暮らしでも、試みてみてはいかがでしょう。



ハナムラ・チカヒロ

ランドスケープアーティスト。大阪府立大学准教授。哲学と科学に基づく現象デザインを手がける。たまに舞台や映画で俳優も行う。第1回日本空間デザイン大賞・日本経済新聞社賞受賞。2017年に著書『まなざしのデザイン』（NTT出版）を出版。



インスタレーションは3月の夕方、日没の時間と重なるように行われました。無数のシャボン玉が、光庭を満たしていきます。

環境は生物の中にある

京都大学総長・理学博士
山極壽一

クリエイティブディレクター
小池一子

居場所のことを考えていくと、それはつまり「人間のこと」を考えるに至ります。ならば私たち人間はそもそもどういう生きものなのでしょう？ 霊長類学と人類学を研究し続けている山極壽一さんに、『くらし中心』を代表して小池一子がうかがいます。



人間独自の社会性というもの

そのとき、食物自体の安全や安心よりも、持つて帰る「人」を信用するようになったんです。

小池 仲間として信頼できるかどうか。

山極 この時点で、ものを使ったコミュニケーションの素地が生まれました。栄養補給と同時に、食べものを通して人間関係を調整する手段となっている。衣服も同様で、動物の毛皮は着脱不能で生まれつき着ているしかない。でも人間は毎日着替えることができる。それによって身体を保護するだけでなく、自己主張もできるし、コミュニケーションの手段にもなる。

小池 住まいに関してはどうですか？

山極 住がほかのふたつと決定的に異なるのは動かせないこと。一度建てたらなかなかそれを変えられない。むかし家を建てるときは、近隣の住民たちの同意が必要で、みんなの手を借りながら建てていました。いろんな職人さんが集まって、周囲の環境になじむものをね。そしてその家に住む家族だけでなく、隣近所とのコミュニケーションを考えた間取りになっていました。もつと遡ると、人類の祖先は地上性の肉食動物を避けるために、洞穴や崖壁に家族や仲間と寄り合って寝ていたと考えられています。

でもいまは個人の好みに応じて、環境から完全に切り離されたものとして建てています。資本主義の時代、個人の欲求を実現する方向に変わっていった。住に限らず、衣食住すべてに言えることです。

山極 コンビニエンスストアやファストフード店に行けば、いつでも食事ができます。家族で食べものを分かち合わずとも、個人が好きなきに好きなものを食べればよいという考え方ですね。京大の食堂にも「ぼっち席」があるんですよ。

小池 え？ 食堂なのにひとりぼっちってどういうことですか？

山極 ついたてで仕切られていて、向かいの人を気にせずひとりで食べられる。ひとりで食べたいんだけど、ひとりで食べるのを見られるのは恥ずかしい。個の要求と、孤独になるのは辛いという、相反する複雑な心理を反映していると思います。学生たちを見てみると、80年代くらいから増加していた自己実現、自己責任、孤立化というものが逆行して、いまは家でも車でもシェアしたり、どちらかというともみなでいることの方に価値を置き始めていると感じています。

小池 山極さんが学生の頃、研究室に大学院生が個室をつくって暮らしていたという話を拝見して、それって理想的だと思いました。

山極 人間社会は、家族と、家族が複数集まった共同体を併用しています。これは人間にだけ見られる社会性なんです。ゴリラは家族だけ、チンパンジーは共同体だけで、どちらかしかない。でもその社会性が薄まってきている現代において、コ

小池 今回の小冊子のテーマである「居場所」は、さまざまなとらえ方ができます。自分にとつての居場所とは、居場所がないという不安、新たな居場所をつくる試み……。そもそも生きものにとつての居場所って、どう考えればいいのでしょうか。

山極 「生物は身体の外に環境を担い込んでいる」。これは日本の霊長類学の創始者で、私の師である今西錦司の言葉です。ごく簡単に言うと、生物はそのあたりにあるものを食べて生きていて、それが生物の身体をつくっている。だから環境は生物の外にある。

小池 なるほど、私たちは地のものを食べて、地のものから衣服をつくり、住まいも風土に合ったものを、その土地にある材料でつくってききました。

山極 そうです。でもいまは、遠くアメリカやアジアから来ている食物を食べ、人工的な繊維で身を包んでいる。環境を担い込んでいないんです。

衣食住はコミュニケーション

山極 人間の祖先は、熱帯雨林からだんだんと草原へ、北への移動を始めました。それはとても大きな変化で、たとえば食べものは、自分で取って、自分の目で見て、安全を確かめた上で食べるのが基本だった。それが行動の範囲を広げた結果、取って持ち帰ることを始めました。熱帯の外は地上性の肉食動物がたくさんいて危険ですから、安全な場所に集まってみんなで食べることも始めた。

ミユニティとして機能しているのが大学なんですね。いろんな研究室やクラブがあつて、家族や共同体以上の深い付き合いができる。同世代だし、似た好みを持つている。だから大学から家に通うみたいな人が出てきてもおかしくない。

小池 学生にとつて、ほんとうに心地いい場所になっているんですね。

山極 しかも少し距離を置いて、お互いに干渉しあわないというマナーもある。家族は干渉しあうのが当然と思われているから、かえって軋轢^{あつれき}が高まります。親とは年代が違いますから、同じ話題で盛り上がることもない。

小池 山極さんがおつしやる人間独自の社会性って、どのような経緯で生まれたのでしょうか。

山極 「高い共感性」を発達させることができたからでしょう。本来、集団の論理と家族の論理はまったく違っていて、矛盾と対立を孕^{はら}んでいます。人間は約200万年前に脳を大きくし始めました。脳はエネルギーを食う器官で、それゆえ身体の成長が遅くなります。その結果、家族が集まって、共同で子育てをする必要に迫られた。そして子育てを優先課題にして、さまざまな協力体制を整えていきました。食物を持ち寄って一緒に食べ、子守歌という音楽でみんなの気持ちをひとつにして。他者を思いやる心というものも育まれました。そうやって培ってきた共感社会に、私たちは半永久的なアイデンティティ、帰属意識を持ちます。同じものを食べて、着て、同じ音楽を聴いて、同



小池 一子（こいけ かずこ）

東京都生まれ。1960年代にデザインに関する執筆、編集活動を開始。1980年の「無印良品」創業以来、アドバイザリーボード、2009年より「くらしの良品研究所」所長をつとめる。2016年より十和田市現代美術館館長、武蔵野美術大学名誉教授。

じ喜びや悲しみを味わう。そういうものが身体化して、その土地の文化にもなる。

遊びながらルールはつくられていく

小池 当然、衣食住にも反映されますね。

山極 おつしやる通りです。文化を身体化することによって、我々は生き続けてきた。「安心安全な社会をつくりましょう」という標語がありますよね？ 安全は環境の物質的整備ですから、ものでつくれると思う。でも安心は決してものではなく、なぜなら人が与えてくれるものだから。

動物は同じ群れの仲間しか信頼しません。常に一緒にいないと信頼できないから、いったん離れたら二度とその群れに戻れないんです。でも人間は日常的にいろんな集団に出たり入ったりして暮らしています。

小池 それは家族や育った社会に安心感を持っているからでしょうか。

山極 信頼感ですね。たとえばお父さんが2年くらい単身赴任で不在でも、同じ仲間として家族も共同体も迎え入れます。動物は2週間いかなかったらもう戻りません。チンパンジーでもゴリラでもニホンザルでも。目の前から消えるということは、彼らにとつては死と一緒なんです。

小池 それは厳しい世界ですし、人間は家族と共同体という社会性を両立できたからこそ長期間の不在も許容してきた。ところでゴリラの社会は上下という考えがないんですって？

山極 メスが動かないニホンザルの社会と違って、ゴリラの社会はメスが動く。その集団にいたくなければ、ほかのオスのところや別の集団に平気で引っ越す。オスがいくら強そうな顔をしていても捨てられちゃうわけです。そのためオスはメスの機嫌を取る必要があるし、子どもを保護する役割も与えられている。オスは身体の大小に関係なく、対等に付き合うことを心がけています。

小池 だからメスや子どもにやさしい。

山極 子どもを一所懸命保護すると、「やさしいおじさん」と慕ってくれます。保護というのは遊

んでやること。遊びにおいては身体の小さな子どもの方がイニシアチブを握っている。大きい方が強制しても長続きしないし、追っかけたり追いかけられたり、役割を交代しながらでないとは楽しくならない。

そして重要なのは、お互いの身体的能力やそのときの気分によって、自分たちでエスカレートできるルールをつくっていくこと。人間の子どもの実態はそれをよく知っているはずなんです。でもいまの人間はルールで教えようとする。それはいけないことだと思います。自分やほかの子どもたちの身体がどういうふうにできているのかを学ぶ重要なチャンスを奪っている。

場所を無視してつながるように

小池 人間の居場所としての住まいは、家族と共同体という社会性のなかで育まれてきたもので、でもその社会性が希薄になってくると、居場所への意識も変わってきているでしょうか。

山極 それはどちらが先だということではないけれども、大切なのは、コミュニケーションの手段が変わったということです。これまで人間は、ものを介在させて身体でつながることができましたところがインターネット上にヴァーチャルな空間が広がるようになったことで、ものを介さずに脳でつながる機会と時間が急増した。直接的な身体接触ややりとりというのが、信頼や親密さとい

共鳴感が宿り、特別なものが生まれた気持ちになる。それはネットにつながっているだけでは生まれません。脳だけがちよつと飛躍しているけれども、僕たちの身体はまだまだプリミティブ。たとえば衣服は人間の皮膚です。その皮膚感覚というものでコミュニケーションしてきたのですから、無印良品もその点に着目したものづくりをしています。

ただきたい。

小池 そう言っていただと嬉しいですね。ずっと受け継いできた素材や柄というものを分かち合うといったことは、誕生以来心がけていることです。

山極 ものを使ったコミュニケーションから発展させて、人間同士のつながりをぜひ新たににつくっていただきたいです。

家族と共同体というふたつの社会性が人間に「高い共感性」をもたらしただけです



山極 壽一（やまぎわ・じゅいち）

1952年東京都生まれ。京都大学総長、理学博士。日本霊長類学会会長、国際霊長類学会会長を歴任。専攻は霊長類社会生態学、人類進化論。1978年よりアフリカ各地でゴリラの野外研究に従事。著書に『「サル化」する人間社会』（集英社インターナショナル）、『家族進化論』（東京大学出版会）など。

AIにどれだけ代替されても、人間は、土地や自然環境の結びつきと、身体というものからは逃れられません。衣食住も環境を担い込まなくなつたとはいえ基本的にまだプリミティブで、毎日食べないと生きていけない。だから毎日の食事が重要だし、誰と食べるかということも大切です。

小池 単に舌の問題ではなくて、誰かと一緒に食べることで生まれるおいしさがありません。

山極 相手と自分の境界を越えて、一体化できる。

くらしの良品研究所から

2018年6月 MUJI HOTEL BEIJINGがオープンしました



天安門広場を目前に望む北京中心街の一角。MUJI HOTEL BEIJINGは、いくつかの世界遺産が点在する北京のなかでも、特に壮麗な宮廷文化の空気を感じられる地域にあります。細い裏路地、胡同に一步踏み入れれば中国の伝統的な四合院の町並みに、かつての老北京の暮らしぶりを垣間見ることができますが、近隣には現代的なハンドドリップの小さなコーヒーショップも育ちはじめています。ホテルには天安門の夜景を見ながら食事を楽しめるレストラン「MUJI Diner」、フレッシュジュースや各種デリがテイクアウトできる「Café & Meal MUJI」、北京の文化や見どころを学べる本も多数揃えた「BOOK LOUNGE」などがあります。北京の魅力を十分に味わうための、心地よい旅の拠点が生まれました。

MUJI HOTELは2019年春に銀座に日本1号店の開業も予定しています。

書籍『A LIFE WITH MUJI』刊行開始



1980年の誕生以来、無印良品には数多くのクリエイターが関わっていますが、もっとも密な関わりを持つのが、「無印良品らしさ」を維持するために構成されたアドバイザーボードメンバーです。なかでもインテリアデザイナーの杉本貴志さんは、永きにわたって無印良品のあり方を問い続けてきました。主要店舗の数々をデザインするのみならず、新たな分野への進出を後押ししてきたのも杉本さんです。鋭く、厳しく、でもとても大きな視点で、無印良品のこれからを見つめ続けてくれました。世界を旅して見えたこと、ものの持つ力、人との出会い、暮らしについて、デザインのあるべき姿、そしてもちろん、無印良品のこと。アドバイザーボードメンバーによる書籍『A LIFE WITH MUJI』シリーズの第一弾となる本書には、杉本さんの躍動感あふれる考えが詰まっています。

杉本さんは2018年4月に他界されました。生前の、みずみずしい言葉に触れることのできる一冊です。ぜひ、お手にとってご覧ください。

くらしの良品研究所とは

「くりかえし原点、くりかえし未来。」を合言葉に、これからの時代に求められる良品像を、みなさんと一緒に探っていく“ラボラトリー”です。店舗とインターネットを介して、生活者であるお客さまと対話しながら、既存商品を点検し、新しい商品を育て、世界のより多くの人々に「これでいい」と共感していただける、感じ良いくらしのかたちを考えていきます。

www.muji.net/lab

◇この小冊子は、背表紙に付いた2つのリングをファイルの穴に通して、ストックすることができます。